

第 13 講 ミケーネ文明の衰退と自然災害説

気候変動説

LHIII B2 期末の気候変動

農業に打撃

文明の衰退

(1) ハンティントンらの多数説

急激な温暖化と乾燥化

ハンガリー平野での洪水、カスピ海の水

位上昇、アルプスや北欧での氷河の後退、

炭素 14 の減少 = 太陽活動の活発化

↓

地球規模での温暖化 → 亜熱帯高気圧帯が地中海上空に張り出す

↓

地中海における暑く乾燥した長い夏

ポーラーフロント、ハンガリー上空に停滞

↓

地中海における降雨量の著しい減少

(2) 安田喜憲説

急激な寒冷化と湿潤化

オランダで採取された酸素 18 の変動

シリアやトルコ、ギリシアにおける花粉

ブナの花粉の増加：寒冷な気候を好む

柳や水生植物の増加：

湿潤な気候を好む

長雨による傾斜地から土壌流失

貧栄養の赤色土壌の露出

↓

麦作の減少、オリーブの増加

問題点

大規模な気候変動を示す証拠はない
ギリシアを含むエーゲ海域での酸素 18 のデータがない
土壌流失は生じていない
ティリンスの例は土地利用の失敗

地震説

LHIII B2 期末期にギリシアから小アジアに及ぶ極めて広範囲な地域
でマグニチュード 4 以上の地震の群発

↓

宮殿の建物の破壊
シリアのラスシャムラのイメージ先行
Drews の批判
地震で破壊された文明はない